

取材日：2017年7月6日



「住吉スタディー」をベースに地域の医師が糖尿病医療の向上をめざして活動。

Point of View

- ① 病院の糖尿病専門医と地域の医師が勉強会や臨床研究を通じて連携
- ② 「糖尿病連携手帳」を連携パスとして活用し、病院と診療所の機能的な併診を実現
- ③ 病診連携によるインスリン導入の有効性を臨床的に証明

地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪急性期・総合医療センター
糖尿病内分泌内科主任部長

馬屋原 豊先生

権藤診療所
院長

権藤 純先生

医療法人希望会
辻村内科循環器科
院長

辻村 英一郎先生

医療法人武内医院
院長

高山 淳美先生

医療法人河南医院
院長

河南 里江子先生

地域全体の医療レベル向上や臨床研究までめざした勉強会

大阪市南部の住宅街に立地する、大阪急性期・総合医療センター（以下、急性期・総合医療センター）は阪南6区（西成区、阿倍野区、東住吉区、平野区、住之江区、住吉区）の地域医療支援病院でもある。

同院の糖尿病内分泌内科と地域の診療所の医師たちによって立ち上げられた勉強会が、糖尿病における病診連携のベースとなり、さらに糖尿病医療をテーマとする臨床研究を論文にまとめ、学会発表を行うまでになっている。勉強会の名前は「住吉スタディー」（【資料1】）。

急性期・総合医療センター糖尿病

内分泌内科主任部長の馬屋原先生と「住吉スタディー」発足時メンバーで辻村内科循環器科院長の辻村先生に、その成り立ちについて聞いた。「阪南6区の中でも当院のある住吉区は糖尿病を専門的に診る病院がほかになく診療所にも専門医が非常に少ない。そこで当時、大阪府立病院（現・急性期・総合医療センター）

糖尿病代謝内科部長、つまり、私の前任者に当たる鈴木正昭先生（現・大阪府済生会千里病院糖尿病内科部長）が病院と診療所が協力する必要性を感じスタートさせたのが『住吉スタディー』です」（馬屋原先生）「糖尿病患者をともに診ていくには顔の見える関係をつくるのが肝要だ」という鈴木先生と区内の診療所の



左から馬屋原先生、権藤先生、辻村先生、高山先生、河南先生

先生方との思いがきっかけになりました」(辻村先生)

同じく2002年の立ち上げ時から参加した医師のひとりが、権藤診療所院長の権藤先生。地域で数少ない糖尿病専門医である。

「実は当初、必ずしも糖尿病の地域連携だけをめざしていたわけではありません。まずは、地域の中核病院と診療所の医師とが顔を合わせ、お互いに相談しやすい場を持つという勉強会でした」(権藤先生)

そして、辻村先生が続ける。「とはいえ、単なる仲良しグループで終わるつもりはありませんでした。病院と診療所の医師がともに学び、地域全体の医療レベルを向上させ、臨床研究を行って学会発表もしたい。めざしたのは全国に向けて発信できる活動です」(辻村先生)

辻村先生の専門が循環器内科であるように、糖尿病・内分泌以外の各内科、整形外科、皮膚科など診療所からの参加者の専門は多彩だった。

地域の非専門医は学び育ち 病院は糖尿病教育入院を堅持

こうして始まった「住吉スタディー」だが、メインテーマは誕生時の目的どおり、自然と糖尿病に収斂していく。病院でインスリン導入された患者を診ている診療所で、血糖コントロールなどに苦慮する非専門医が多かったからだ。たとえば、武内

【資料1】

「住吉スタディー」参加施設のマップ



河南病院院長の高山先生の場合。「私は、内科全般と小児科を診ており、その中に糖尿病の患者さんも少なからずいらっしゃいます。続々と発売される新薬の使い方、患者さんが高齢になられるのに合わせて薬剤をどう変えていけばいいのか。そうした疑問に答えてくれるのが『住吉スタディー』でした」(高山先生)

河南病院院長の河南先生は、2009年の開業時から参加している。

「私の専門は呼吸器内科で当初はインスリン導入を手がけるなど考えてもいませんでした。しかし『住吉スタディー』でいろいろな講演を聞き、実際の症例に沿った勉強会で学び、今では大きな問題のある患者さん以外は、自分で判断して自らインスリン導入を行うようになりました」(河南先生)

糖尿病専門医の権藤先生は、急性期・総合医療センターの存在の大きさを話してくれた。

「外来でのインスリン導入はできてもその後、きちんと通院してセルフコントロールができる患者さんばかりとは限りません。そんな患者さんには病院での教育入院をすすめています。病院では合併症の評価をまとめてしてもらえる点もありがたい。『住吉スタディー』で信頼関係が築かれているので、急性期・総合医療センターへの紹介は非常にスムーズにできます」(権藤先生)

急性期・総合医療センター側も、診療所の医師たちの期待に応えようと尽力している。

「急性期病院なので慢性疾患患者の入院は難しくなっています。ただ当院の糖尿病教育入院は半世紀近くの歴史があり意義ある入院ですから、なんとしても継続させていきたいと思っています」(馬屋原先生)



「糖尿病連携手帳」をパスに 病診連携のシステムを構築

【資料2】

病診連携における紹介患者の大阪急性期・総合医療センターでの流れ

「住吉スタディー」をベースにして地域の糖尿病医療の質が向上するとともに診療所から病院への紹介も病院から診療所への逆紹介も増加した。そこに弾みをつけたのが「糖尿病連携手帳」（以下、連携手帳）だ。「大阪府の各地域ではいくつかの糖尿病連携パスが作成されており、2010年にスタートした日本糖尿病協会の連携手帳はそれらを参考につくられたと言われています」（馬屋原先生）

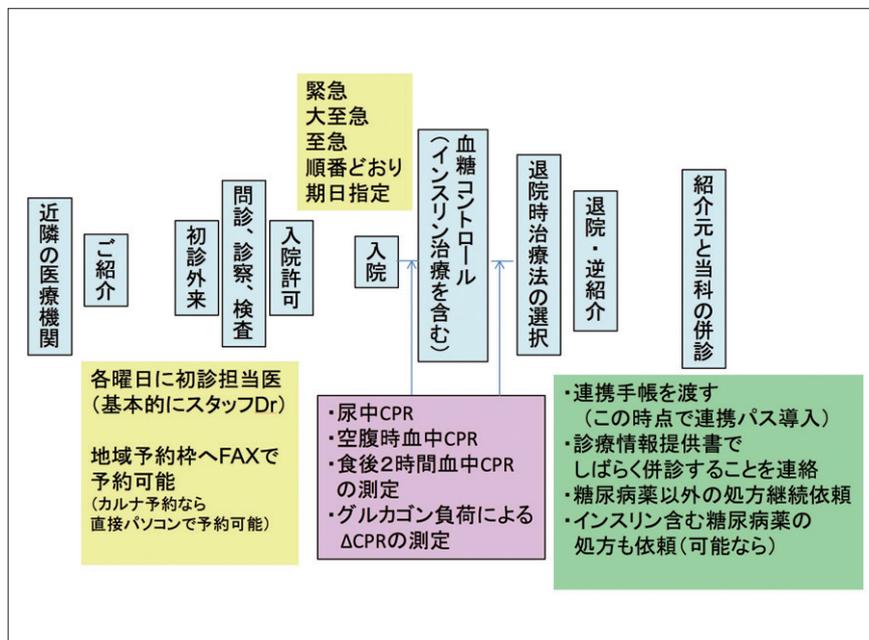
早速、同年から、急性期・総合医療センターの糖尿病内分泌内科では連携手帳をパスとした診療所との連携を図る。

「紹介されて教育入院した患者さんを診療所にお返しする際に必ず連携手帳をお渡しするようにしました。ただ、最初の1年近くは、連携手帳を持って再度、受診してくださる患者さんは皆無の状況で、入院中に私たちが行った治療が正しかったかどうかを検証できず、頭を抱えてしまいました」（馬屋原先生）

しかし問題の解決は、ある意味、非常にシンプルだった。

「和歌山県で熱心に糖尿病の地域連携に取り組まれていた山本康久先生（現・那智勝浦町立温泉病院院長）に倣い、患者さんに連携手帳をお渡しする際、必ず当院の次回予約を取っていただくことにしました」（馬屋原先生）

患者の状態によって、予約は1～3ヵ月後。連携手帳と診療情報提供書で、同院で行った検査結果と治療経過を地域の診療所に伝えて逆紹介する。その後、患者は地域の医師のもとで治療を継続し、数ヵ月以内には再び同院へ。このようにして、患者の状態がきちんと安定するまでは



病院と診療所とで併診するシステムが確立された（【資料2】）。

現在、パスで連携している診療所は、住吉区を中心に阪南6区で約70施設に達している。

インスリン導入の検証で 臨床研究でも結果を出す

連携手帳をパスにした糖尿病の病診連携が順調に稼働し始めた2010年から、辻村先生らが立ち上げ時にめざしていた臨床研究に力が注がれるようになる。そして「住吉スタディー2」の名称で行ってきた「地域病診連携における糖尿病連携手帳を用いたインスリン導入の臨床研究」が結実を迎えた。

インスリン導入後の経過を追い、パスを活用した連携の有効性を検証した研究は、2013年には日本糖尿病学会年次学術集会で報告、2015年には論文にまとめられ急性期・総合医

療センターの医学雑誌に掲載される（【資料3】）^{〔1〕}。インスリン導入は、病院の専門医が行っても診療所の医師が行ってもほとんど遜色なく、むしろその後の量の調節が難しい。長く安定的に良好な血糖コントロールを保つには、病院と診療所との併診が有効であることを、臨床研究を通して実証したのだ。

「最初の処方病院で行っても、その後の処方は地域のかかりつけの先生にお任せし、微妙な量の調節は再び病院が担う。連携手帳をパスとした病診連携で、これから多くの患者さんを合併症から救えると考えています」（馬屋原先生）

医師同士で培った連携の輪を いずれ地域の多職種にも

「住吉スタディー」は今、参加施設約80までの規模になったそうだ。最後に中心メンバーである先生方が

抱いている課題、また今後の展開について、何を思い、どう考えているのかを語っていただいた。

「私たちの医療、私たちの連携によって、たとえば糖尿病の合併症は減少したのかどうか、数値にきちんと違いが出ているのかどうかを知りたい。そのために日々の診療から得られるデータを提供して、地道に『住吉スタディー』を続けていくつもりです」(辻村先生)

『住吉スタディー』のおかげで、いつでも専門医に相談できる環境を得られたからこそ、患者さんが高齢になっても診てこられたのだと思っています。

ただ、これからは医師だけでなく栄養指導やフットケアなど、多職種の方々との協力が必要になってくるでしょう」(高山先生)

「高齢化が進めば、糖尿病の合併症だけでなく、がんや認知症を併発す

る患者さんはますます増えます。

そうしたときに、患者さんの血糖だけでなく全体をどうマネジメントしていくのか、今後の大きな課題です」(河南先生)

「河南先生のご指摘のとおり糖尿病分野においても高齢の難しい症例が増加するのは確か。これまでの病院の専門医と地域の医師の連携からさらに進めて、介護まで含めた多職種との連携が必須になると思います。

医師以外のスタッフは看護師だけだったり、また、スタッフ教育にまでなかなか手がまわらない診療所も多くあります。しかし、患者さんと接する時間の長いスタッフにこそ糖尿病ケアの知識を持っていただきたい。何かしらの工夫をしないとダメですね」(権藤先生)

『住吉スタディー』によって医師同士の理解や連携は確実に深く強くなったと思います。

これからは、それを発展させ、たとえば病院で活躍する医療スタッフなどが主導して、診療所の各スタッフとの間にしっかりとした関係をつくり、多職種連携へとつなげることが重要でしょう」(馬屋原先生)

スタートから15年を経た「住吉スタディー」は全国に向けた糖尿病医療連携における情報発信を目標に、パワーアップしながら実践と研究を続けていく模様だ。

※参考文献

[1]馬屋原豊、清水彩洋子、藤田洋平、片岡隆太郎、藤木典隆、畑崎聖弘、権藤純、辻村英一郎：住吉スタディー2 地域病診連携における糖尿病連携手帳を用いたインスリン導入の臨床研究、大阪府立急性期・総合医療センター-医学雑誌 38(1), 9-12, 2015

地方独立行政法人大阪府立病院機構
大阪急性期・総合医療センター

〒558-8558
大阪府大阪市住吉区万代東3-1-56
TEL：06-6692-1201

権藤診療所

〒558-0023
大阪府大阪市住吉区山之内2-8-14
TEL：06-6692-3290

医療法人希望会
辻村内科循環器科

〒558-0011
大阪府大阪市住吉区苅田5-15-13 Sビル3F
TEL：06-6606-2525

医療法人武内医院

〒558-0023
大阪府大阪市住吉区山之内2-12-5
TEL：06-6691-1817

医療法人河南医院

〒558-0032
大阪府大阪市住吉区遠里小野1-12-9
TEL：06-6691-1322

【資料3】

連携パスを用いた入院インスリン導入患者で
2年以上経過観察できた症例のHbA1c値の推移

